

みやざき アングル

紅梅をよみがえらせたのは、たまたま寺に立ち寄った宮崎市跡江、寿園芸場代表榎本壽士さん(左)。十二年前から、樹木の成長を促す溶液製造



都城市母智丘のサクラ治療を依頼した元同市職員(左)と、満開のサクラの下で植物談議にふける榎本さん＝2007年4月3日

無農薬溶液で紅梅復活 コケ除き樹勢回復

住民たちが「寺の紅梅」と呼んでいる国富町の末、七十種のミネラルを含まない天然塩や木酢(住職)のウメがこの春、三年がかりの治療を終えて見事な花を咲かせた。樹齢二百五十年を越すこの紅梅は、約六年前から全く花のない枝が出始め、樹形も変わらなくなっていった。永井住職も一時は「四十四世の自分の代で枯らすのか」と覚悟したと語る。

造園家の直感名木救う

発した溶液についても「実験計画法に基づいた実験をしていないので科学的には証明できない」と語っている。多くの専門家や樹木医が溶液の効能に懐疑的な見解を示す中、榎本さんは実績で答えを出してきた。今では樹木の病気を完治への自信を深め「枯れる寸前の木が勢いを取り戻し、感謝されるのが喜び」と話す。

榎本は一九八三(昭和五十八)年ごろから、妻と共々都の造園家に依頼し三回あるが、榎本さんが三回



万福寺にある枯山水庭園の中心に立つ紅梅が復活し、傷んで切られた枝元から花芽を確認する榎本さん。表情には笑みがこぼれる＝2007年2月14日

＝毎月一回掲載＝
(写真部長・沼口啓美)

樹勢が回復した。地衣類は菌類の仲間である灰色が地衣類だ。藻類と共生し、色は灰や黄緑などの薄い紙状。日の木に地衣類が付くと、本園で古木の幹の感じを弱り果てて枯れる様子を

出するために、着色されて見えてきた。「地衣類を除けば木は勢いづくはず」。造園家の直感だった。植物に詳しい宮崎市の専門家(左)は「地衣類は樹木の成長に直接的な影響はないが、特殊な成分を持っており、植物への生理作用はほとんどと解明されていない」。榎本さんが開



浄専寺境内の道路沿いのしだれ桜の幹にびっしりと付いた地衣類。落葉した冬は判別しやすく、溶液の噴霧治療が続く＝2006年11月13日



クリーン上でのしだれ桜の治療をする作業員を見上げ、無縁と力メラを手を走りながら指示する榎本さん＝2006年11月13日、五ヶ瀬町の浄専寺

榎本さんが庭造りを手掛けた宮崎市の民家。地衣類を落とし生き生きとした緑が陽光を浴びる庭＝2007年4月4日